

親の受容と子どもの社会的適応—親の子どものとらえ方から—

岩 井 文 子

親子関係を考えていくための重要な側面として、親の子ども受容を考えた。

親の子ども受容を考えるために、その受容的態度が、子どもにとらえ方としてあらわれると考え、子どもにとらえ方をとらえようとした。このことは、Fiedrerの研究で、治療者と患者との関係を、治療者の患者のとらえ方から検討したことや、Dymondの共感性をとらえようとした研究などから、親と子においても、子どもにとらえ方に、親の受容が反映されるであろうということが考えられた。

この研究では、親が子どもを真に受容している場合は、子どもは適応した傾向をもつであろうという仮定のもとに、子どもの社会的適応、子どもの自己像の特徴と親の子どものとらえ方との関係から、親の受容を検討しようとした。

調査Iでは、子どもの自己評定(RS)と子どもの親が考えていると思う自己評定(FSP, MSP)を7段階評定で、48項目について求め、RSとFSP, MSPのずれで、子どもに意識されている親の子どものとらえ方—ありのまま子どもをとらえている—を考え、親の受容を考えようとした。被験者は、男18名、女子17名である。子どもの社会的適応を担当教師の子どもの行動特徴の記述から、よりよい社会的適応群と低い社会的適応群にわけて考えた。RSとFSP, MSPのずれをDscoreで求め、その大小と、社会的適応の2つの群との関係を検討した結果では、男子の場合に、RSとFSPのずれの小さいものが、よりよい社会的適応群に多いという結果がみられたのみであった。

社会的適応のとらえ方が担任教師から得られた資料によるとに問題もあるが、ずれの大きさ、ずれの方向について、調査Iの資料を分析したところ、ずれの大きいものは、自己評定に用いた評定の段階が、非常によくあてはまる、かなりあてはまる、というある特徴をはっきりと持っていることを示す段階を多く用いる傾向がみられ、自己評定での表出度といったようなことが、ずれの大きさに関係があると思われた。またずれの方向を検

討してみると、いくつかの項目で、よりよい社会的適応群と低い社会的適応群で違いがみられ、ずれの方向を検討する必要があると思われた。

調査IIでは、矢田部ギルフォード性格検査から選んだ60項目(社会的内向S、のんきさR、一般的活動性G、支配的でないことA、劣等感の強いことI、愛想のないことAGの特徴を調査する項目各10項目)について、子ども(中学2年生)と親から、次のような評定を得た。その結果から、親の子どものとらえ方と子どもの自己像の関係を考え、親の受容を考えようとした。1.子どもの自己評定RS 2回、2.理想的な自己評定IS、3.RSについて今のままでよいか、変えたいと思うか、4.父親(母親)が考えていると思う自己評定FSP(MSP) 5.父親(母親)の子ども評定FS(MS)、6.父親(母親)の理想の子ども評定FIS(MIS)、7.FS(MS)が今のままでよいと思うか、変わってほしいと思うか、の各被験者について、12の評定である。

親の子どものとらえ方は、RS、IS、FSP(MSP)の関係からと、RS、IS、FS、FIS(MIS)の関係から、子どもの現実をありのままとらえているか。理想的であるとみているか(現実をありのままみている場合とずれてみている場合)の面を考え、また7の評定から、現実を肯定しているかの面を考えた。

子どもの自己像は、RSから各性格特徴を示す項目ごとにとらえた性格特徴の傾向、3つの評定から、現実を肯定しているか、2回のRSの一致率の面から考えた。

これらの親の子どものとらえ方と、自己像の組合せの結果関係がみられ、親の受容のあらわれとして考えられる、親の子どものとらえ方は、次のような点である。

- 1 子どもをありのままとらえていること。
FSPとRS、FSとRSの一致率の低いものは、2回のRSの一致率が低く、自己に対して、安定した意識をもっていないように思われる。また、男子においては、

* 男子64名、女子58名について

* 男子48名、女子20名について

* MSP, MSとRSの一致率もともとめ、父親と母親とでずれている場合は、別に考えた。以下FSP, FSとの一致率という場合にも同じようである。

* 中学2年生

性格特徴、S、A、Agで、社会的外向、支配的、攻撃的な傾向のものが、多くみられた。GIで、活動的、劣等感小の傾向が多いということはなく、自己肯定的なものが多いということもないので、あまり望ましい自己像の特徴でないように思われる。従って、親がありのまま子どもをとらえているということが、受容の1つのあらわれであると考えられる。

2 親が子どもを理想的であるとみていること。

i) 現実をありのままみている場合

FSp、FSとRSが一致していて、IS、FISとの一致率の高いものは、自己肯定的なもの、性格特徴で、社会的外向、のんき、活動的、支配的、劣等感小の傾向のものが、低いものに比べて多くみられた。

ii) 現実をずれてみている場合

FSp、FSとRSがずれていて、FSp、FSとISとの一致率の高いものと低いものでは、差はあまりみられず、女子の場合には、低いものに、劣等感大の傾向のものが多くみられた。FSとRSがずれていて、FISとの一致率の高いものは、男子の場合に、自己肯定的なもの、社会的外向、のんき、活動的な傾向のものが多くみられた。

親が子どもの現実をありのままみている、理想的であると思っていることは、受容のあらわれと考えられるが、親がずれてみて理想的であるとみていることは、子ども自身は理想的であるとしていない場合には、受容のあらわれであるといえないように思われる。親自身がとらえた子どもを理想的であるとみている場合は、子どもをずれてとらえている場合であっても、受容のあらわれとして考えられる。

3 親が子どもの現実を肯定的にみていること。

親の子どもの現実の肯定率の高いものは、男子の場合に、自己肯定的なもの、社会的外向、のんき、活動的、支配的、劣等感小の傾向のものが多くみられ、この面も受容のあらわれとして考えられる。

以上のような結果から、親の子どものとらえ方としてあらわれる親の受容を考えていくことができると思われた。しかし、調査IIの資料では、親の子どものとらえ方を考えるのに用いたと同じ項目を用いて、子どもの自己像を求めている。従って、親の子どものとらえ方と、子どもの自己像との関係が、子どもの自己像—自己肯定的とか、社会的外向の傾向—に対するとらえやすさ、ということによる関係もはいつているのではないかと思われる。

この点を検討するために、教師による子ども評定TSと理想的な子ども評定TISを求めた。教師の資料が得

られた子ども^{*}の中から、自己肯定的—否定的、各性格特徴の強いもの—弱いもの、2回のRSの一致率の高いもの—低いものについて、親からと教師からのとらえられ方について比較した。親からのとらえられ方は、上で検討してきたと同じ傾向、例えば自己肯定的なものは、RSとFSが一致していてIS、FISとの一致率が高くRSとFSがずれていて、FSとISの一致率はあまりたかくないが、FSとFISの一致率は高いといった傾向がみられる。教師からのとらえられ方も、親からのとらえられ方と比較すると、ほぼ同じ傾向であることがみられた。しかし、自己肯定的、活動的、劣等感小の傾向のものを、親は、ずれととらえている場合で理想との一致が高いとらえ方をしている傾向があるが、教師の場合にはそのようなとらえ方をしていない。従って、かなり子どもの特徴に対してのとらえやすさが関係しているが、それだけでない面もあり、親の子どものとらえ方として考えてよいと思われる。

また、各項目について、それぞれの評定の間で、ある項目の評定の特徴(RSで○とかFSで○)に対しての他の評定のしやすさがあるかについて検討してみた^{*}。

ある項目でのRSの特徴(○とか×)とISの一致率、その特徴の肯定率、FSの特徴とFISの一致率、その特徴の肯定率を求め、各性格特徴を示す評定ごとにまとめてみると、社会的外向、活動的、支配的、劣等感小の傾向を示す評定で、IS、FISの一致率が高い項目が多くみられた。またIS、FISとの一致率の高い評定は肯定される率も高い傾向がみられた。また、ある項目でのRSの特徴とFSの一致率を求め、各性格特徴を示す評定ごとにまとめると、社会的外向、支配的な傾向を示す評定で、一致率の低い項目が多くみられた。

この結果を考えると、項目への評定の特徴が、かなりかたよったものがあり、また、それが、ある性格特徴に多くみられるということが、上で検討してきた、親の子どものとらえ方と、子どもの自己像との関係を考えてきた結果に含まれていると考えられる。

以上のような問題点を考えると、親の受容を子どものとらえ方で検討していく場合に、子どもの特徴についてのとらえやすさ、また、評定に用いる項目の、評定のされやすさについて統制して考えていく必要があると思われる。

* 教師の評定が得られたのは男20名、女子20名である。

* 資料は男子48名